

(大阪東北部・大阪東南部)

大阪・花屋敷遺跡
はなやしき

- 1 所在地 大阪府東大阪市吉田二丁目
- 2 調査期間 ○六一一調査 二〇〇六年(平18)四月～七月
- 3 発掘機関 (財)大阪府文化財センター
- 4 調査担当者 岡本圭司・湯本 整・影山美智与
- 5 遺跡の種類 集落跡・耕地跡
- 6 遺跡の年代 一三世紀後半～一八世紀
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

花屋敷遺跡は、近鉄河内花園駅の北側に所在する。河内花園駅前
の再開発、及び近鉄奈良線連続立体交差化に伴って調査が行なわれ、

中世(一三世紀後半～一五世紀)の集落が検出された。

調査地の西側は、旧大和川の分流である玉串川が菱江川と吉田川とに分岐する地点にあたっていたと考えられる。また、遺跡の南西約一・六kmには、河内国守護畠山氏の居城であった若江

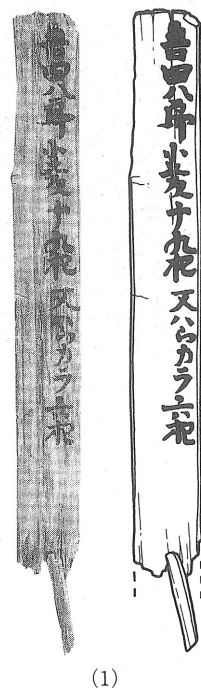
城跡がある。

集落は、周辺の条里地割に規制されて正方位をとる溝で囲われた屋敷地によって形成されていたと考えられる。木簡は、これら屋敷地を区画したと考えられる東西溝(○六一一調査八〇溝)から二点出土した。木簡出土地点近辺の溝の土層は、上・中・下・最下層の四層に分けられるが、木簡は最下層の上方ないし下層の下方あたりで出土した。同溝からは土師器皿、瓦器椀、瓦質羽釜・火鉢、備前焼播鉢、常滑焼甕、須恵器東播系練鉢、中国製青磁椀など多くの土器・陶磁器の他、曲物・織機部材・草履・下駄・漆器椀・毬杖の毬などの木製品も出土している。一三世紀後半から一四世紀後半にかけての遺構と考えられる。

また、この溝が埋没した後に作られた、導水用の竹管を伴う結構を使用した貯水施設を検出した。同じ面において、土師器皿が集積する方形の土坑も検出した。一五世紀の遺構面と考えられる。さらに上位の中世末から近世にかけての三面の遺構面では、耕作地及びそれに伴う灌漑用の溝を検出した。

8 木簡の积文・内容

- (1) 〔吉カ〕
□田八郎小麦十九把又ハ□カラ六把
〔芋カ〕
(200)×27×8 019
- (2) 「西方源三上」
70×19×4 051



(1)

(2)

(1)はヒノキの板目材。上端は切り折り。下端は欠損するが、文章は完結すると思われる。表面は平滑に整えるために削られている。

上部は縦方向に裂けており、一文字目が「吉」であるならば、「吉田八郎」ということになり、当地の地名とも符合し興味深い。なお、一文字目は「吾」「悟」の可能性もある。

「苧」の読みも不明確ではあるが、共伴する木製品に織機部材があることから、織物の原材料となる苧との関係を示唆する。小麦、もしくは苧の売買か、借用に関する木簡と考えられる。

(2)はスギの板目材。上端は粗く面取りを施し、下端は尖らせている。表面は平滑に削られている。付札であろう。

西方氏は河内畠山氏の一族で、一時、河内守護代の地位を得るが、活躍する時期は嘉吉の変（嘉吉元年（一四四一）以降であり、溝の埋没時期とは一世紀程度の開きがあると思われる。当木簡と同氏との関係の是非は今後の課題である。

なお、木簡の釈読にあたっては、関西大学の原田正俊氏、八尾市立歴史民俗資料館の小谷利明氏、(財)大阪府文化財センターの水野正好氏のご教示を得た。

9 関係文献

(財)大阪府文化財センター『花屋敷遺跡』Ⅰ(財)大阪府文化財センター調査報告書一六一、二〇〇七年)

同『花屋敷遺跡』Ⅱ(同)二六二、二〇〇七年)

(岡本圭司)